

所員自著紹介

1. 書名：『マーカス・ガーヴェイの反「植民地主義」思想 パンアフリカニズムとラスタファリズムへの影響』
2. 著者：小倉英敬
3. 出版社：揺籃社
4. 出版年月：2017年7月20日
5. ページ数：258頁

19世紀末にジャマイカに生まれたマーカス・ガーヴェイ（1887～1940）は、同島に定着した黒人バプテリスト教会やアフリカ系宗教・文化の影響を受けて、反「植民地主義」的な姿勢から、ブラック・ナショナリズムと「アフリカ帰還」の思想を形成し、1914年に世界黒人地位向上協会（UNIA）を設立した。ガーヴェイは、1916年に渡米したが、第1次世界大戦後の米国における黒人を取り囲む流動的な情勢と相まって、UNIAは1919年以後米国、カリブ諸国、アフリカ諸国に組織を拡大し、世界初の環大西洋的な黒人解放運動に発展した。

ガーヴェイは、1927年に米国を国外追放された後、1940年にロンドンで死去したが、その思想的影響は、パンアフリカニズムやラスタファリズムの展開を通じて、米国、カリブ地域の黒人解放運動、アフリカ諸国の独立運動に大きな影響を残した。特に、ジャマイカではガーヴェイの黒人精神の覚醒と「アフリカ帰還」を模索する思想は、1930年代に形成されたラスタファリズム、1960年代末に登場したレゲエ音楽に影響を与えた。また、1990年代以降に米国やカリブ海諸国に高まった奴隷制に関する賠償請求運動や、黒人の生命尊重の主張にガーヴェイの影響が見られる。本書は、グローバル・ヒストリーの視点から、このようなマーカス・ガーヴェイの反「植民地主義」思想の全貌解明を試みた。

（小倉英敬）

1. 書名：『破壊のあとの都市空間——ポスト・カタストロフィー』の記憶
2. 著者：熊谷謙介（編著）
3. 出版社：青弓社
4. 出版年月：2017年3月
5. ページ数：366頁

日本において記憶の歴史学・表象論が脚光を浴びたのは、1995年以降であったように思われる。戦後50年を迎えて記憶の継承や歴史修正主義が問題となり、『ショア』が日本公開され、戦争やアウシュヴィッツの「証言」をめぐる議論が巻き起こった時期である。

それから20年余り経ち、現在問いかけられているのは、けっして「記憶か忘却か？」といった二者択一のものではない。市民の日常を不安に陥れる事件が繰り返され、311などの巨大災害を経験した時代にあって、「記憶の義務」という掛け声だけでは解決することができない問題が起こっている。失われたものをどのような表象様式によって浮かび上がらせるか——、さまざまな芸術作品や都市のプロジェクトを通じて見ていく必要がある。

本書はそうした問いへの応答の試みである。平安末期の京都から関東大震災後の東京まで、リスボン大地震後の思想家たちの考察から、パリで繰り返される革命の後に残されたものまで、南北戦争といった内乱から、世界大戦後のベルリン・ローマまで、さらにはロスアンジェルスや香港におよぶ20世紀の災害と戦乱の歴史を、「カタストロフィー」という概念でまとめながら、その「あと（後・跡・痕）」の姿が描かれていく。そこに見られるのは普遍的な答えではなく、それぞれ、ある時代・ある地域で実践されてきた人間の営みなのである。

（熊谷謙介）

1. 書名：『日中戦争開戦後の文学場 報告／芸術
／戦場』
2. 著者：松本和也
3. 出版社：神奈川大学出版会
4. 出版年月：2018年2月（予）
5. ページ数：400頁（予）

本書は、タイトル通り、日中戦争開戦後の文学場に関する考察を、報告／芸術／戦場という3つの視角から展開した9本の各論に、方法論に関する補論を付した研究書である。もう少し具体的にいえば、昭和12年7月7日の日中戦争開戦以降、主にはその直接的・間接的な影響によって、文学者-文学作品-トピック-その他関連する文学活動にどのような展開（変化）が生じたのか、日中戦争を関数とする時局がどのように関わったのか、また、その帰結としてどのような新たな問題が生じたのかなどについて、文学場の特徴がよく示されたと思しき複数の切り口から検証したものである。

そういった一連の問題系を、主には当時の新聞・雑誌上の文学関連言説の、あとう限り広範な調査・分析に即して、言表された限りにおける文学者の言動や作品、評価軸の変動について考え、各論として論じたものの集積が本書である。

なお、本書は神奈川大学出版助成Aに採択されて出版の運びとなったものである。関係各位に、この場を借りて、御礼申し上げます。

（松本和也）